



死者に手向ける花も無し。

ぽつりと、唐突に呟いたので僕は反応出来なかった。

死者はどこへ行く？

質問の意味を聞き返すことさえ躊躇われるほどの静寂の中で、小鳥のさえずりだけが聞こえる。

「昨日、あの枝垂れ桜で首を吊った男がいたよ。枝というよりは幹に縄をくくりつけて自分の力で喉を圧迫して死んだんだ」

病室の窓から、中庭の縁を丸く囲むようにして枝垂れ桜が植えられている。中心にはベンチが向かい合うように設置されており、患者の何人かが穏やかな日差しを浴びていた。

「ああ、大変だったね」

くつくつつ、と何かをこするような音がして、それが笑った声なのだと顔を見て理解した。皺だらけの顔を中心に寄せるようにして、薄く白い唇を三日月形にしている。

「死体が見つかった朝は驚いたが、夕方になったらみんな死体のことなんざ忘れて、夕食の献立について考えていたね。ほら、見て御覧。人が死んだ場所だっていうのに、気持ち良さそうに昼寝なんかしているよ」

僕は彼が何を言いたいのか分からなかった。声の調子はいつもと同じ世間話をしているようだが、内容には刺々しいものを感じる。白眼が濁った瞳は死人みたいで感情が掴みにくかった。

「どこで誰が死のうと生きている人間は、すぐ忘れていくもんだってことさ。ああ、誰だったかな。確か梶井基次郎の『桜の樹の下には』に出てくる一節に「桜の木の下には死体が埋まっている」という文章があったね。あれは美しい表現だ」

曖昧に頷いて僕は賛同の意をあらわす。彼が何を話したいのか、ますます分からなくなっていく。

「私は忘れることを悪だとは思わない。悪なのは、死について無関心になることさ。許されざる悪だ。つまり、ここの連中は無意識的悪が内在にあるわけだ」

患者の車椅子を押している優しげな中年女性も、ベンチの上で無邪気に寝ている男性もみな内在に悪を隠し持っている、憂鬱になる考えだ。

少なくとも、今彼らの胸には悪がないと思いたい。安らかに日光の恵みを受けている今だけは善であってほしい。隠しきれない悪を持つ者がいることは、若い僕でも知っているが、中庭でくつろいでいる人の中にはいない。

僕の考えを読み取るように彼は首を振りながら

「そうさね、今は善かもしれないね。だが、無意識の悪だと言っただろう。人が死んだ場所だということに憐れみの情を見せることすらしない、今の彼らはまさに悪そのものさ」

皺を震わせるようにして愉快そうに話す。

「悪の定義が分からない」

率直に述べると彼は困ったような表情をした。

「悪は生きる術だ。悪がない者は生き残れない。忘れることによって困難を越えていく人間に必要不可欠なものだ。否定する者は善を知らず善に似た悪を崇拜している」

「では悪を責める理由はないのでは？」

白い棚から煙草を取り出し、彼は火を点ける。院内は当然禁煙だが、僕は注意しなかった。

「悪を意識すること、これが人間にとって必要なことさ。生まれながらに罪を背負う原罪のように。悪を受け入れる、それが善を知る方法だ。善を知りたければ悪を知り、悪とは反対に伸びる道に善がある。悪の先にあるのが善だ」

「善。あなたは悪と善にこだわるね」

つるりとした額を撫でて彼はまた窓に視線を向ける。つられて僕も視線を向けた。桜が陽光に照らされて、極楽浄土のような幻想的な世界を中庭に構築している。

「一度罪を犯したら二度と善人にはなれないなんて世間は馬鹿だよ。罪を犯した者は罪の重さと悪を知る。間抜けでなければ理解するだろう、悪とは善に連なる道であることを。曲がり角を間違えたから悪になったのだと」

「あなたは間違えた？」

煙草の煙がゆらゆらと室内に漂い、僕と彼の境界線のように流れて行く。この煙の線から先には進めない。

「善への道はあまりにも複雑な道さ。間違えたんだろう。誘惑的な曲がり角が多すぎる。死を忘却する行為を悪だと気がつくのが遅すぎた」

桜の下で首を吊った死んだ男の死を忘れないようにするため、桜を見つめ続けることにしたのだと彼はぽつりと呟く。

「気がつくのに時間がかかりすぎたし、間違った曲がり角を曲がりすぎてもう善への道には戻れないだろう」

悟ったような顔で彼は、僕を真正面から見つめる。

分かっていたのだな、と僕は彼の堂々とした態度に感心した。白衣の中から鈍く光るメスを取り出しても彼は身動きひとつしない。

「日が当たると瞳が、緑がかって見えるところが親父さんそっくりだな。息子だとすぐ分かったよ」

「長い間離れて暮らしていたので、あなたには絶対分らないと思っていた」

ここは裁判にかけることができないと判断された犯罪者たちが入院している病院である。皆、精神に異常あり、責任能力を問えないとされた者ばかりだが、中には巧妙に心神喪失または心神耗弱を装って

潜り込んできた卑怯者がいる。

罪を恐れて演じてここへ逃げてきたのだ。そんな行為を遺族が許すわけにはいかない。僕の父親以外に二十人もの人間を殺したこの老人が寿命を全うするなど、社会が許しても僕は許さない。

「僕はここへ潜り込んだ、責任能力が問えると思われる患者を殺す。これが僕の悪であり、遠回りな善への道だ」

悪は善への道にいつか通じるというのなら、僕はメスをふりあげることに躊躇いなどない。今は患者殺しの医者として悪人になったとしても、この行為は悪人を断罪した善なる行動だったと僕は自分に誇れるだろう。

「命を惜しむには命を奪いすぎたな。医者として生きたが、救った命よりも死なせてしまった命の方が多すぎる。忘却することで忘れようとしたが、その考え自体が悪だと悟ったよ。忘れるべきではなかった、たとえ一人でも覚えているべきだった」

暮れかかった日が部屋に差し込み、僕の瞳に緑を滲ませていくだろう。目の前にいる男に殺された父のように。父の瞳に滲む深い緑に僕は海を見た、男は死を見た。

メスが風のような唸りを上げた。

桜は白い花だったが、死体の血を吸い上げて色がついた、そんな話を聞いたことがある。それならばこの男の血を与えようか。

新たなる悪人の誕生に祝福の花を捧げるために。

死者に手向ける花はない、死者はどこへも行かず土に還る。

死者に手向ける花も無し

<http://p.booklog.jp/book/25239>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

表紙画像：写真素材 足成様

<http://www.ashinari.com/>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25239>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25239>